アントレプレナーの生き方（1）　～ジェームズ・ダイソン　その 1～

ジェームズ・ダイソン　肖像
【提供　ダイソン株式会社　】

「吸引力の変わらない、ただひとつの掃除機」。ダイソンと聞くと、この印象的なフレーズと共に、洗練されたデザインのサイクロン式掃除機を思い浮かべる人が多いのではないでしょうか。ダイソン社は 1993 年にイギリスで創業されましたが、実は世界初のサイクロン式掃除機は、ダイソン社設立前の 1986 年に日本で製品化されています。1998 年には、ダイソン日本法人が設立されるなど、日本と縁の深い会社でもあります。このダイソン社の創業者であり、サイクロン式掃除機を発明した人物こそ、ジェームズ・ダイソンです。

1947 年にイギリスのノーフォーク州生まれたジェームズ・ダイソンは、現在 77 歳であり、今でもダイソン社の創業者兼チーフエンジニアとして活躍されています。

ダイソン氏は、サイクロン式（遠心分離式）の掃除機を世界で初めて開発・製造しました。王立美術大学（RCA）出身のダイソン氏は、「デザインと機能は切り離せない関係にある」「完全なる美というのはエンジニアリングの追求から生まれる」「新製品の技術的利点は、技術そのものを活かして製品を楽しく使えるようにすれば必ず消費者に理解してもらえる」といった独自の強い信念をもっていました。そんなダイソン氏だからこそ、実際に、デザイン的に美しく、かつ画期的な機能を兼ね備えた製品を開発し、一代にして世界でも有数の家電メーカーを築きあげました。しかし、この「世界のダイソン」に至るまでに、ダイソン氏はなんと 5,126 個もの掃除機（試作機）を作り、いずれも失敗に終わっているというのです。

もっとも当のダイソン氏は、気が遠くなるほど繰り返した試作機づくりについて、「大変だったけど、楽しくて夢中になれるプロセスだった」と語っています。その頃当たり前だった紙パック式掃除機に疑問をもち、紙パックの交換を必要としない家庭用掃除機をつくるため、ダイソン氏は自宅にこもって五年もの時を研究に費やしました。果てしない数の試作機の失敗はもとより、妻子と莫大な住宅ローンを抱え、借金まみれだったにも関わらず、ダイソン氏は新技術の開発に挑戦し続けました。なぜダイソン氏は、途中で投げ出さず、先の見えない生活の果てに、自らの仕事をやり遂げることができたのでしょうか。

その疑問に答えるためには、ジェームズ・ダイソンの自叙伝の冒頭を引用することから始める必要があるように思います。

※※※

「でも、ジェームズ。もっといい掃除機があるというなら、フーバーかエレクトロラックスがとっくに作っていたんじゃないか？」

僕がこの言葉を初めて聞いたのは、たしか 1979 年だったと思う。初めて設立した会社を去り、生活の保障、収入、社会的地位を投げ捨てて、自宅裏のガラクタ小屋で進めていたプロジェクトに参加してくれと旧友を説き伏せる直前のことだ。それまで経験した仕事は、新種の手押し車、上陸用高速艇、そして 2、3 の空想などなど。12 年間、僕は借金の重圧に苦しんだ。英国と米国の大手メーカーに自分の製品を売り込んで、あえなく失敗。自分の掃除機を守るために、大西洋の両岸で厳しい法廷論争を繰り広げた。そして 92 年、寒くて雨の多い英国の田舎で、僕は独りで考え、設計し、作り、テストした機械の、たった 1 人の所有者として、独力で生産を始めた。

ダイソン掃除機の写真
【提供　ダイソン株式会社　】

何百もの試作品、何千もの修正、そして何万回ものテストを重ねたあげく、僕は借金地獄にあったけど、サイクロン（遠心分離式）を愛した。その後、2003 年までに英国の 4 世帯に 1 世帯がダイソンの掃除機を所有するようになった。そして会社は 35 ヶ国で年間 3 億ポンド以上を売り上げ、設立から 10 年で全世界に 1,000 万台以上の掃除機を販売した。僕は、研究開発の鬼となって、ひたすら掃除機の改良を続けて来たけれど、自社工場における 2、3 の驚くべき技術革新のおかげで、世界で最も小型、軽量、高性能のサイクロン式掃除機を製造することができた。それは世界最先端のエレクトロニクス市場で十分通用する機械であり、欧米企業の新技術を搭載した機械としては、世界で最初に日本で発売されることになった機械だ。これは、僕がそれをどう作ったかの物語である。

※※※

世界に名だたるアントレプレナー、ジェームズ・ダイソンのストーリーは次号に続きます。

なお、今回の引用元であるジェームズ・ダイソンの自叙伝『逆風野郎　ダイソン成功物語』は、堀船中図書室で借りることができます。興味をもった方は、この夏休みにぜひ読んでみてください。

参考文献:ジェームズ・ダイソン『逆風野郎 ダイソン成功物語』日経 BP 2004 年 343 頁